

<実践報告>

「いじめ・不登校」に対応できる教師を育てるための授業

大和義史 長野県教育総合センター

今田里佳 信州大学附属教育実践総合センター

A Class for Managing Problems of Bullying and School Refusal

OHWA Yoshihumi: Nagano Comprehensive Education Center

IMADA Rika: Center for Educational Research and Training,

Faculty of Education, Shinshu University

Shinshu University The Faculty of Education offers a class “Bullying and School Refusal” which aims to help the students obtain knowledge and skills for solving problems of bullying and school refusal. The main purpose of this class is to make students who are going to be capable teachers understanding school children. In order to accomplish the goal, the students do case study, practice of counseling, practice structural group encounter and roll playing. These seem to be effective to deepen the students' understanding of bullying and refusal to go to .

【キーワード】いじめ 不登校 事例研究 カウンセリング 構成的グループエンカウンター

1 研究の背景

不登校に関する全国・長野県の動向

不登校とは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童・生徒が登校しない、あるいはしたくともできない状態にあること（ただし、病気や経済的な理由によるものを除く）をいう。

文部省の調査結果によれば、平成10年度1年間に30日以上欠席した不登校児童・生徒数は、小学校で約2万6千人（前年度比25.3%増）、中学校で約10万2千人（前年度比20.0%増）となっている。不登校状態が継続している理由としては、漠然とした不安感などで学校に行けない「情緒的混乱」が26.5%、多くの要素があって主因を特定できない「複合」が22.7%、何となく登校しない「無気力」が21.5%、「遊び・非行」が10.8%である。児童・生徒数が減少傾向にある中で、不登校児童・生徒の数は年々増加の一途をたどっており、昭和41年度の調査開始以来最多となっている。（平成12年1月、「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」より）

長野県教育委員会の調べによれば、平成10年度一年間に30日以上欠席した不登校児

童・生徒数は、小学校で 657 人（前年度比約 5%増）、中学校で 1,741 人（前年度比約 18%増）となっている。不登校状態が継続している理由としては、漠然とした不安感などで学校に行けない「情緒的混乱」が約 38.9%，多くの要素があって主因を特定できない「複合」が約 21.4%，何となく登校しない「無気力」が約 19.8%，「遊びや非行」が約 3.3%である。長野県の場合も、不登校児童・生徒数は増加の一途をたどっている。

いじめに関する全国・長野県の動向

いじめとは、自分よりも弱いものに対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの。いじめであるか否かの判断は、あくまでもいじめられている子どもの認識に立つ。なお、おこった場所は学校の内外を問わない。

文部省の調査によれば、平成 10 年度全国の小・中・高等学校等で発生したいじめの件数は、小学校 12,858 件、中学校 20,801 件、高等学校 2,576 件、特殊教育諸学校 161 件の合計 36,396 件で、平成 7 年度の 60,096 件をピークに平成 8 年度 51,544 件、平成 9 年度の 42,790 件と、3 年連続して減少している。（平成 12 年 1 月 文部省「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」より）

長野県でも、平成 10 年度の小・中・高等学校等で発生したいじめの件数は、小学校 128 件、中学校 201 件、高等学校 27 件、特殊教育諸学校 0 件の合計 356 件で、平成 7 年度の 613 件をピークに、平成 8 年度の 432 件、平成 9 年度の 429 件と連続して減少している。いじめの内容は、冷やかしのからかいが最も多く約 30.7%，次いで仲間はずし約 19.9%，言葉での脅し約 16.2%，暴力を振るう約 9.7%，持ち物隠し約 8.8%，集団による無視約 7.1%となっている。

近年、統計的に見れば「いじめ」の発生件数は減少傾向にあり、一見落ちついているかのように見えるが、いじめの問題を取りまく状況、または今学校で生じている問題の本質はなにひとつ変わっていない。その中身を見れば、事態の重さに大きな変化はなく、深刻な事件に発展する可能性をはらんだ状況は残されたままであると考えなければならない。

まず統計上の数値は、学校で認知された「いじめ」の件数に過ぎないという点であり、子どもを取りまく人間関係の複雑化によって、「いじめ」はますます見えにくくなっているし、子どもたちも、大人や教師に訴えようとしなくなってきたのではないかと危惧するところである。

森田ら（1999）が 1997 年に行ったいじめに関する調査によると、いじめの形態の中で、教師が一番よく発見しているのが、「イヤな悪口を言ったり、からかったりする」や、「叩いたり蹴ったり、脅したりする」という、行動としてわかりやすいものであり、逆に発見しにくいものは、「無視をしたり仲間はずれにする」や、「みんなから嫌われるような噂をしたり、紙などにひどいことを書いて渡したり、持ち物にひどいことを書いたりする」「お金やものをとったりこわしたりする」といった、陰湿で、精神的にダメージを与えるような方法のいじめである。また教師は、児童・生徒がいじめを行ったとき、どの程度指導しているのかを見ると、先生に指導を受けたと応えた加害者は 3 割にも満たない。

次に、学校のすべての教師が、今日の「いじめ」問題をきちっと捉え、「継続的に本気で取り組んでいかなければ」と認識しているかどうかという点である。「今も昔もいじめはあった。子どもはそうして鍛えられ成長するものだ」、あるいは「いじめられる側にもやはり問題がある」「本人が否定している以上いじめではない」といった考え方がまだ残ってはいないだろうか。確かにそういった側面も否定はできないが、こうした考え方は、どうしても教師の日常の姿勢、言動や表情に微妙に現れてくるであろう。教師の人権感覚が、いじめ解決の鍵を握ることは言うまでもない。

不登校・いじめの予防・介入・フォローアップのために

不登校問題もいじめ問題も同様に、「どの子にも、どの学校・どの学級にも、起こりうること」である。実際の問題として、日本中の多くの学校が、そして長野県内の多くの学校が子ども数の減少に反比例した不登校の増加にとまどい、数の上では減少していると言っても決してなくなりたくないいじめの問題を抱えているのである。教育に携わる者は、いじめや不登校の問題は常に起こりうることという認識をしっかりと持っていなければならない。

具体的には、①日頃の教育に根ざした予防的介入、つまり不登校にならずにすむような、いじめたり、いじめを容認しないような子どもの心づくり・学級づくり、学校づくりを地道にしていくことや、②早期発見と早期対応のために、子どもたちへの注意深い目配りと気配りを心がけ、自らの価値基準や人権感覚について知り、磨いておくこと、また、③おこってしまったらどのような方策をとるか、について事前に大枠を考えておき、実際必要なときにすぐに対応できるよう準備を怠らないことが、非常に重要になってくるだろう。そして、このような教育実践を行っていくためには、ある程度の知識とスキル訓練を受けておくことが必要であると思われる。

2 授業の目的

信州大学教育学部では、教育に携わっていくであろう学生に、いじめや不登校の対応に関する知識とスキルを身につけてもらうため、“事例を通して、いじめ・不登校の理解と援助を中心に、生徒指導・教育相談の基本である児童・生徒理解の資質能力を高める”ことを目標として「いじめ・不登校」の授業を2・3・4年生向けに開講している。平成11年度は、週一回、3時間10回の集中講義形式を採り、10月から12月までの水曜日に開講された。

具体的には、事例の検討を通して、不登校やいじめの問題についての理解を深めると共に、共感的理解と対応の在り方について考え、児童・生徒理解と援助の力量を養うことをねらった。また、カウンセリング等の演習を体験しながら、自分自身を知ること、児童・生徒理解の実際や人間関係づくりについて学ぶことを通して、不登校やいじめを予防する力量を養うことをねらった。

3 授業計画

上記の目標をもとに、以下のように授業計画を立てた。

回	授業のねらい	授業の概要	備考
1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 演習を通して、学級づくりを生かす方法を学ぶとともに、受講者相互の人間関係づくりを図る。 ・ 不登校の現状や背景，問題点等を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 演習：人間関係，コミュニケーションづくり～出会いの体験 ② 講義：不登校の現状と問題 <ul style="list-style-type: none"> ・ 不登校問題の具体的理解～事例を通して 	<ul style="list-style-type: none"> ・ テキスト「不登校の理解と具体的援助の在り方」
2 3 4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 不登校の子どもへの共感的な理解を基本にしながら，その背景や要因について考えると共に，家庭訪問や登校刺激等，個に応じた対応・援助の在り方を具体的に学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 講義，演習：不登校の具体的理解と援助の実際 <ul style="list-style-type: none"> ・ 事例研究～小4女の事例演習 《グループ討議→全体討議→講義》 ・ 不登校問題とその対応についての基本的な理解 《小問題から各グループごとに4題を選択→グループ討議→全体討議と講義》 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 問題提示プリント(15題)
4	<ul style="list-style-type: none"> ・ カウンセリングマインドと教育相談的な接し方の重要性について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 講義：不登校を防ぐために <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育相談的な児童・生徒への接し方 ・ カウンセリングとカウンセリングマインド 	
5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 演習を通して，自己理解を深め，児童・生徒理解の力をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 演習：カウンセリングマインドを身につけて <ul style="list-style-type: none"> ・ 対人関係づくり～感受性訓練 ・ 人を理解するとは 《ロールプレイ》 	
6 7 8	<ul style="list-style-type: none"> ・ いじめの問題の現状や背景，問題点等を理解する。 ・ いじめる側，いじめられる側など，それぞれの子どもの心の内や心理的背景について考えながら，個に応じた指導・対応・援助の在り方を具体的に学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 講義：いじめ問題の現状と問題点 <ul style="list-style-type: none"> ・ いじめ問題の具体的理解 ② 講義・演習：いじめ問題の理解と対応の実際～事例を通して <ul style="list-style-type: none"> ・ 見えにくいいじめの具体的理解 ・ いじめている子どもの心と対応 ・ いじめられている方にも問題があるという考え方 ・ いじめられている子どもの心と対応 ・ いじめの周囲にいる子どもの心と対応 《グループ討議→全体討議→講義》 ③ 講義・演習：いじめ問題の予防のために～事例を通して <ul style="list-style-type: none"> ・ いじめのサインと早期対応 ・ 保護者との連携 《グループ討議→全体討議→講義》 	<ul style="list-style-type: none"> ・ テキスト「不登校の理解と具体的援助の在り方」

8	・ 演習を通して、子ども同士、子どもと教師の人間関係づくりを進めるSGE等を体験する。	① 演習：いじめや不登校を予防するための学級の人間関係づくり ・SGE (Structured Group Encounter) ・対人関係ゲーム	
9	・ 演習を通して、傾聴の重要性と、現実的に対応できる力をつける必要性を認識する。	① 講義・演習：教育相談を進めるために ・ミニカウンセリング～聴く力をつける	
10	・ 演習を通して、自己を見返すとともに、自己の課題や今後の研鑽の方法について考える。	① 演習：自己理解、自己を磨く ・交流分析とエゴグラム ② 授業のまとめ ・学んだこと、自己課題として取り組みたいこと	・用紙，解説プリント

4 授業経過

第1回の授業において、受講者に単純なアンケート調査をした。アンケートの内容は、以下の通りである。

アンケート調査

次のアンケートにご協力ください。

男・女

- 1 あなたは、小・中・高校時代に、「学校に行きたくないな」と思ったことがありますか。
① ある ②ない
- 2 それは、いつのことでしたか。
①小学校 年生 ②中学校 年生 ③高等学校 年生
- 3 それはどんな理由からでしたか。
(記述)
- 4 そのとき、あなたは、登校することを回避しましたか。
①した ②しない
- 5 4で、「①した」と答えられた方に、おたずねします。
(1) それは、どれくらいの期間でしたか。
約 間
(2) その時は、どんなことを考えたり、どんなことをしたりしながら過ごしていましたか。(記述)

このアンケートへの回答者は14名であった。問1に関して、「学校に行きたくないと思ったことがある」と答えた学生は14名中9名であり、約65%の学生が、小・中・高等学校時代に学校へ行きたくないと考えていたことがわかった。もちろん、極端に少ないサンプルであること、「いじめ・不登校」という授業名であり、受講生は、このことに関心を持っているということを考えてみれば、不思議ではないのかもしれないが、教員をめざして勉強している教育部の学生である彼らのなかに、約65%もの「学校に行きたくないと思った」経験を持つものが含まれていることは興味深い。

1997年9・10月に深谷らが中学生におこなった調査(モノグラフ・中学生の世界 vol59)で登校時の気分について質問しているが、その中で、32.4%の生徒が、あまり行きたくない・できれば家にいたいと回答していることを考えてみると、この授業の受講生の中の「学校に行きたくないと思った」経験率は、かなり高いのではないかと思えるのである。また、香取(1999)は過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究で、いじめ体験の影響で志望した職業の上位3位は、保母・教師・カウンセラーであり、いじめを体験したものは人を援助したり、人の心理や行動を学ぶ学部を志望する傾向が高いと述べている。

「学校に行きたくないと思った」ことと、いじめ体験とは、同じことではないが、アンケート調査の問3に書かれた学校に行きたくないと思った理由には、いじめを受けた・クラスになじめなかった・イヤなことをされた・友達がいなかった・友達から無視された・友達に裏切られた、というようなものがあげられている。いじめの被害者の「他者尊重」が高いことについて、森田・清水(1994)は自らの被害者としての体験から、他者が理不尽にいじめられたときの身体や心のありさまを思いやる精神を身につけていくことが十分にあり得る、と述べ、この傾向は香取(1999)の調査によっても明らかにされている。これらのことは、この講義の受講生の多くが、自分の経験をもとに、子どもたちの心を思いやることができるかもしれないということを示唆している。

アンケート調査の結果もふまえ、授業は、受講生同士の討議・演習を中心に進められた。少人数であったことも幸いし、討議も活発に進められた。自らの経験等をもとに、受講生それぞれが、発言をし、議論を戦わせることができたように思う。

5 授業の感想(学生の感想文から)

- この講義で、私自身が役に立ったと感じることは以下の2点。物理的な面と精神的な面である。物理的な面とは、講義の最初の頃から最終回までにたくさんやったゲーム(遊び)を知ることができたという点である。2年生の参加が多かったのでほとんど知らない人であったが、そういう人と仲良くなれるゲームなどを数多く知ることができたような気がする。実際の学校現場でも使えるものを得たような気がします。我々学生自身が楽しめるもので子どもたちがあんなに喜んでくれるとは思っていなかった。逆に言えば、まず我々が楽しいと思わなければ、子どもたちにも楽しいと思ってもらえないのではないかと思った。

次に、精神的な面としては、数多くのいじめや不登校の事例を検討する中で、たくさんの方の意見を聞くことができた点である。大学生活も今年で4年目になるが、実際の教育現場の事例について学生同士でこんなに語り合うことは初めてであった。その中で、自分が見えていなかった視点や、気づかなかったことを発見することができた。学年を越えて話し合うことがとても良かったと思う。

- ・ この授業において、子どもとコミュニケーションをとるためにいろいろなゲームを実際して、教師になったときや教育実習で使えそうで良かったです。事例研究は、自分が教師になったときに、もし同じようなケースがあったときには参考になるし、自分が考えていた対応以外に他の人たちの対応の仕方を聞くことができて、そういう考え方もできるんだという新しい発見があって良かったです。

ロールプレイングはぜひやってみて良かったですね。子ども役をした人は、子どもの気持ちを自ら体験することによってより理解することができるし、教師役をした人は、実際の教師はそう簡単じゃないことが身にしみるのではないのでしょうか。理想と現実の違いをわかることが大切だと思います。

- ・ この授業は、自分が将来教員になるのに当たって、ものすごく有益だったと思います。もちろん教員採用試験に対して、学校の問題を的確に捉え、それに対する自分の考えをしっかり持ち、いうことができるという訓練にもなったと思います。けれども、それ以上に今現在学生をしている自分で、子どもと接することがあまりできない自分であっても、今現在の状況において、子どもについて考えたり、多くの人の考えを聞くことができるいい機会になったと思います。

自分が先生になったときに、絶対にこの経験は役に立てることができると思います。初任の時においても、いじめ・不登校の問題が起こらないように、そして、起きているときにすぐに適切な対応がとれるようになれるかも、と少し自信ができました。そして、そうしなければならないと思います。

今の自分にとっても、不登校の子どもたちのキャンプに参加する際や、自分が生活していく中においてでも役立てることができると思います。

- ・ ディスカッション形式をとっていたおかげで、自分の意見だけでなく、多くの人の意見を考えることができた。

自分の意見として、最初の頃うまくまとめられなかったこともあったが、後半になると、自分の考えをまとめられるようになったと思う。教員になってどのような対応をすればいいか具体的にはわからなくとも、何となく見通しが立ったと思う。

- ・ いろいろな意味で楽しかったの一言です。遊べて楽しかったし、すごく有意義で気になる時間で楽しかったです。ただ講義を受けるという形ではなく、実際に自分たちがやってみる、考える、討論するという実践できる授業だったので楽しかった。皆で意見を言い合うと、皆がどう考えているかわかるし、あーなるほどこんな考えもあるんだと、発見させられることもありました。いろんな意見を述べあうことはすごく好

きです。私自身、自分の強い考えがあるわけではないと思うので、つっこまれるとすごく困るんですが、人の意見が聞けるのが楽しみです。もっとしっかり自分の意見を持つといいのでしょうか？先生の授業は、事例に基づいて考えていくので、具体的に分かり易かったし、参考にしやすいと思いました。いじめや不登校の対策について討論する授業も良かったけど、ロールプレイの授業も良かったです。生徒からの悩みを聞いたとき、どう対応するかというロールプレイをおこなったときが一番大きな発見がありました。私は今まで相談をされると、その人は私に何か答えを出してほしいから相談しているんだ、だから何かいいことをいおう、解決策を教えてあげようということばかり考えて聞いていました。でも、まずその子に共感してあげること。質問責めにせず心をはぐしてあげることが大切だということに気づかされました。答えは結局は自分で出すんだから、私はその子のつらさを分かち合っただけでいいことがまず第一なんだと。この授業では、先生から教わったことももちろんたくさんあります。でも一緒に授業をし、考えていく中で、友達から学んだことがすごくたくさんありました。すごく楽しくて有意義な時間でした。

- ・ 良かったと思うことは、自分がよく見えたという点。いろいろな事例を扱って意見を発表したりした中で、私自身の考える傾向、ベストだと考えることの傾向がよくわかった。それは、大切にしていたことでもあるし、また人の考えを聞くことで、はっとさせられることもあった。普段このように人との関わりを持った授業は少ないので、自分の意見などを言っても、それを振り返る機会がない。すぐに意見に反応が返ってくるので、とても充実した授業だったと思う。

これから教師になるときに、役立てるかどうかはまだわからないが、今この時期に、少しでも現場の問題を考える機会があったことに感謝したい。いろいろな学科・学年の人と話ができて、久しぶりに双方向的な授業を楽しんだ。

- ・ いじめ不登校の生徒を理解するということは、私にはまだまだできていない面があって、もっと多くの意見を聞きたかったというのが、私の感想です。いじめ不登校については、いくら事例を考えても、自分がその立場になったときどのような行動をとれるのかということやはりわからないなど思いました。本当に難しいということを実感しました。
- ・ この講義を受けるまで、私はいつの間にか、自分から意見を発表しようと思うことがなくなっていたことに気づきました。そんな意味からも私にとっては、自分の意見を言うだけでなく、人の意見を聞くことで、自分の考えを深めていけることなど様々なことを学ぶことができたと思っています。
- ・ いじめに対しても、不登校に対しても、自分には見えなかった視点を獲得することができた。いじめ不登校に対する実践的な対応がわかった。人に共感するとはどういうことか、話の聴き方のポイントなどがわかった。
- ・ 他人の意見を聞くことが、私がこの講義を受けようと思った第一の目的だったので、

いろいろな意見を聞いたり、実際に動いてみたりできたのは、自分の考えをまとめる上で参考になった。

- ・ 不登校児やいじめられる子の立場になって考えることが深められた。今までは具体的なケースがあったとき、一般的なことしか考えられなかった。つまり、具体的に自分がどう行動するかという点において。また、対象とする子どもを問題児・困る子、手の掛かる子と捉え、すぐに自分がその子をかえよう、その子が他のみんなと同じ子になってくれればと考えている自分がいたことがわかった。相手を思うとき、相手を大切に思うことができないと、相手の立場になって考えられず、相手の気持ちも本当には感じられないと思う。

教師が我を張らない。ということを学んだ。教師が絶対的と考えていると、相手と壁を作ってしまうばかりか、自分が頼りなくつらくなってしまうだろう。教師自身が間違っただ対応をしたと気づいたとき、素直になれるかなれないかが、その後の人間関係、その後の問題をどうするかを左右すると思う。

考察

この授業を通して、それぞれの学生がそれぞれに、いじめや不登校の事例に取り組み、その中から、自分自身を見つめなおすことができたことが、多くの学生の感想からも伺えた。また、構成的グループエンカウンターのための、エクササイズや、人間関係ゲームは、学生自らが楽しみ、受講生同士の親密性を高める効果があったようである。この親密性が、学生同士の討議をよりいっそう自由で、有意義なものにしていったと考えられる。

講義を進める中で感じられたことは、現代の大学生はいじめや不登校に関する知識が豊富であることだった。受講者の中に、いじめや不登校を経験したことのある学生がまじっていたことも討議を深めるきっかけとなったと思われる。事例研究では、私ならこうする、という立場での発言をし、自分が教師としてどのように子どもや保護者たちに対峙していくのかという認識を持っている学生も中には見受けられた。しかしながら、より児童・生徒の視点に近い立場の意見や、担任がこうすべきであるとか、子どもの側に立ってやるべきという建前論も多かったように感じる。

実際にロールプレイなどを実施してみると、知識があり、認識もあると思われる学生でさえ、その知識や認識を活かして対応することは難しいようである。この点を考慮し、ロールプレイなどの模擬実践ができる場面をより多く取り入れた、受講生の知識や認識がより活かせるようなトレーニングに、もう少しウエイトをおいて授業計画を立てるほうがよいのかもしれない。

この講義のなかで学生たちに同様に見られた傾向性、つまり、知識や認識はあるのだが、実践にうまく活かすことができないという傾向は、実は今現在の学校教育現場にもいえることではないかと感じている。こうすべき、こうしなければとわかっているのだけでも、実際の子どもたちや保護者、同僚たちを前にして思うような対応をすることが難しい。知識（知っている）と認識（わかっている）と実践力（できる）とが、一見結びついているよ

うで、実際にはなかなか機能していないために、問題がこじれていってしまうケースも多いように感じる。

例えば不登校は、そのケース一つひとつが全く違うものであり、本や経験から身につけたものは、実際の働きかけには役立たないことも多い。大切なことは、「その不登校をしている子どもの気持ち」と向き合い、「どのような援助・関わりが求められているのか」を考えていくことであろう。しかも、「そう考えたからといって、そうできるという保証はない」ということをふまえた上で、今の目の前の子どもの悩みに寄り添いながら、その心の動きにあわせて理解する力と、柔軟に対応できる力を身につけることが大切である。

また、総合教育センターの教育相談に訪れる、不登校を中心とした子どもの共通点の一つに、「自己肯定感が低い」という点が上げられる。そうした子どもは、学校や友人を求めながらも、現実とのギャップに耐えられず、学校生活に息苦しさや不安を感じて、学校や教師、友人関係をさげ、時にはそれへの苛立ちを訴えてくることもある。また、不登校には至らないが、集団のなかでの自己表現が苦手な子ども、友達つきあいに気を使い疲れている子供が増えてきているように感じる。こうした子どもたちが、積極的に自分を開き、仲間の中へ入っていけるように、具体的に援助していく必要がある。

しかし、人間関係を結ぶことにおそれを抱いている子どもの心に寄り添うことは、現実にはなかなか難しい。学級のなかで、日常的に認めあい、助け合い、励まし合うという学校や学級に、子ども一人ひとりが十分に自己を発揮して生活できる場はあるだろうか。どの子ども、自分から精一杯やったということを認められ評価され、成功体験を味わえる人間関係が育っているだろうか。こうした自己存在感の場の充実には、子ども一人ひとりの心の居場所につながる。対症療法的な対応だけでなく、こうした安心感や信頼感に裏打ちされた人間関係を育てる取り組みに、もっと力を注いでいかなければならないように思う。今後、「総合的な学習の時間」等も利用して、学級に予防的・開発的なカウンセリング、構成的グループエンカウンターやアサーション・トレーニングといった手法を積極的に取り入れ、対人関係のスキルを身につけさせたり、人間関係づくりを日常的に進めていくことが今後の生徒指導の重要な課題となるだろう。こうした視点も大切にして、授業計画や講座運営を進めていく必要があると感じている。

学校教育現場においても、高等教育の場においても、実践力を育てることの重要性が強調されてきているところである。いかにして実践力を養っていくのか今後いっそう検討していく必要があるだろう。

文献： ベネッセコーポレーション 1997 モノグラフ・中学生の世界 vol59

香取早苗 1999 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究
カウンセリング研究 32 1 1-13

森田洋司・清水賢二 1994 新訂版 いじめ 教室の病 金子書房

森田洋司・滝充・泰政春・星野周弘・若井彌一 1999 日本のいじめ 金子書房

文部省 2000 「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」